

復活節後第六主日礼拝

「神の右に座し給うキリスト」

使徒行伝 1 : 8-9

(1)

次週の5月31日礼拝は「ペンテコステ」・

「五旬節」にあたります。

実は、その10日前の5月21日は、教会暦の「昇天日」です。そうと気づいた方は、おそらくいないのではないのでしょうか。

日本の教会は、ほぼ日本の暦に沿った歩みをしてきました。教会暦といえば、「クリスマス」と「イースター」と「ペンテコステ」とは覚えていますが、あとはあまり意識しません。

周東のぞみキリスト教会の週報のナンバーに第〇〇節主日礼拝と入れていただきました。講壇の前に布をたらし、教会暦に従い異なる布を付けていただいたのも、そうした理由からです。

実は、現在の祝日は、裏を返せば、明治以降に定めた天皇の祭りを記念する日とほぼ重なっています。日本のプロテスタント教会の歩みは、150年足らずです。格式も伝統もないまま今日に至りました。

主イエスが十字架に架かり、三日目によみがえられた後、使徒たちによる福音宣教がはじまり、地の果てまでも福音が宣へ伝えられました。その働きを記録したのが「使徒の働き」にあります。しかし、「福音書」と「使徒の働き」との間は、新しい時代とどうか、新しい時代の幕開けがありました。「ガラヤヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天によって行

かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります」(使徒1:11)と二人の御使いから励まされています。その時以来、初代教会のキリスト者たちは、天に坐しておられる栄光のキリストを見上げるようになりました。

天に上げられたイエスが、どうしてそれほどに重要となるのでしょうか。「世の終わるまでわたしはいつもあなたがたと共にいる」(マタイ28:20)との約束を残して天に昇られた主イエスの言葉と密接な関係があるようです。

もし、「使徒信条」の告白から、「天に昇り」・「全能の父なる神の右に座したまえり」を欠くとしたら、私たちの「信仰」と「希望」と「愛」とは、ただ地上だけのものとなります。

今朝は特に、ハイデルベルク信仰問答の問46から問49の問と答えに注目したいと思います。この主イエスの昇天を告白している箇所は、129ある問と答えの中で、最も優れた解釈と見なされており、

問46は、「キリストは天に昇られたということをおあなたはどのように理解しますか」  
答は、「キリストは弟子たちの目の前から天に上げられ、生きている者と死んだ者を裁くためにそこから再び来られるときまでわたしたちのためにそこにいらっしゃるということです。」

「復活」についての問と答は好いのです。しかし、昇天に関する問と答は4つもありませんから、キリストの昇天はわたしたちの信仰にとって極めて重要な、ということに気づかせてくれます。

主イエスが天に昇り、全能の父なる神の右

に座したことから、「三つの益・利益」が与えられたと解説されています。

第一の益・利益は、キリスト者の地上の歩みが、たとえ、どんなに破れ多いものであろうとも、神の右に座したもうキリストは、いかなる時も、わたしたちを執成し、弁護してくださるお方となられたという揺るぎない現実があります。

主イエスが天に昇られたあと、残された弟子たちには寂しさがあつたかもしれませんが、残された弟子の数ですが、12人の弟子たちとその周りに70余の弟子たちがいたと福音書に記されています。さらに、エルサレムの二階座敷で祈っていた者120名ばかり(使徒1:15)とあります。さらに、第一コリント15章5節には、500以上の弟子たちに復活後のイエスが同時に現れたともあります。

主イエスが弟子たちの御側近くにいた時より、主イエスが天に昇られてから後のほうが、より慕わしいおかたになられたのではないでしようか。

わたしたちは、地上に生きている限り、思いと言葉と行いにおいて罪を犯し続けています。それだけではなく、思いがけない試練・誘惑に出会うかも知れません。ですから、主イエスは弟子たちに、「われらを試みに会わせず、悪より救い給え」と祈るよううかがわれました。こつした不確かなわたしたちのため、日々執り成し、弁護して下さるお方が神の右に坐しておられると信じては、たとえ、わたしたちが、他から咎められ、責められたとしても、最後にはわたしの味方として、執り成して下さる、弁護してくださるお方であるはずは、何

と有難いことではないでしようか。

神学校の最終学年に体調を崩し、寝たりの起きだりの生活を繰り返していたことがありました。教師たちや仲間からも厳しい目で見つめられて、すっかり自信を失いかけていたことです。親しい友人の一人が、「結城さん、何時かあなたは大切な役目を果たす時がくると思います」と励ましてくれたのです。何を根拠に何ということかと言ったかとは思いましたが、「おぼれる者、藁をも掴む」です、自信喪失状態のわたしには、その一言が妙に嬉しくあり、励ましともなりました。「言葉が人を生かす」といわれてきました、ボロボロになりかけていたわたしを、執成し、弁護するとはこつしたこつかと思ひ知らされました。実は、こつした体験が、後に牧会者となり、様々な人と出会う機会が多くなると、大切な経験となりました。

主イエスは、今、神の右に座して全世界の人々を執り成す大祭司の務めを果たしておられることが、へブル4章14節でいわれております。「さて、わたしたちは、諸々の天を通って行かれた大祭司なる神の子イエスがおられるのであるから、わたしたちの告白する信仰を堅く守らうではないか。」(へブル4:14)一、

「わたしの父は、今にいたるまで働いておられるのである。わたしも働くのである。」(ヨハネ5:18)と仰せられた主イエスであります。後に残した弟子達を見放したわけでも、放り出されたのでもありません。主イエスは、今も、天上において、神の右に座して、私たちの地上の歩みを見届けておられるお方です。しかも、ただ座してい

るだけのお方ではありません。

使徒7章5節以下をみますと、「彼(ステパノ)は聖霊に満たされて、天を見つめてみると、神の栄光が現われ、イエスが神の右に立っておられるのが見えた」とあります。ということは、ステパノの身に危険が迫った時、ただ、座しているだけではなく、腰を挙げて、立ち上がり、ステパノを天上からしっかりと見届けておられました。

キリスト昇天の第二の益・利益は、「われわれは、かしらとして、そのえだであるわれわれを、ご自分のものに引き上げて下さる、確かな担保として、われわれの肉を天に持つことになるのです。」

「えだ」とは、ブドウの樹の「えだ」でもあります。「えだ」である私たちを、主の御元に引き上げて下さる、それも、「霊」だけでなく、「肉」をも天に持つ、確かな「担保」、保証となられたというのであります。

はじめて、ハイデルベルク問答49の2を読んだ時の驚きを忘れることが出来ません。

天に昇られたキリストが、罪ある、罪を犯し続けている、いえ、罪人のかしらであるわたしを、地上にいる時は勿論、天に昇られてからも、霊肉ともに、担保し、保証しておられるという事実を知った時です。

ルカ福音書23章42-43節には、主イエスの左右に二人の犯罪人も同時に十字架に架けられました。

その囚の一人が、「イエスよ。あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出して下さる。」と哀願した時、主イエスは、「おへへっっておへへ、あなたは、きょう、わたしと一緒にパラダイスにいる

でしょう」と、彼を天に伴う約束をいたしました。

日本の教会では、葬儀の時、信者が亡くなると「召天」と言うようですが、韓国の教会では、ほぼ間違いなく「帰天」といいます。天に帰るです。主イエスは、私たちに先だって天に昇られたお方ですが、それが、今やわたしたちを御国にまで引き上げて下さる「担保」・「保証」となられました。

使徒行伝1章8節と9節に、天に昇られるキリストの姿を見た時を境に、弟子たちは、天を仰ぎ見るようになりました。仰ぎ見るようになって、生前に主イエスの言われた一つ一つの御言の意味までも理解できるようになりました。

たとえば、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、わたしを信じなさい。わたしの父の家には住まいが、たくさんある。もしなかったならば、そう言っておいたであろう。あなたがたのために場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」(ヨハネ14:1-3)とおっしゃられた、あの一言一言の真意です。

神の右に座しておられるキリストを仰ぎ見ることに、主イエスと弟子達との関係は、より身近なものとなり、分け知らぬ恐れや不安から、彼らを解放したに違いありません。

ヘブル書2章15節に、「死の恐怖のため、一生涯奴隷となっているものを解放つためである」ともありますが、人間の抱えている恐れの本質を見事に指摘している箇所

といえます。

何故、人は、こんなにも死をおそれるのでしょうか。「死」そのものを恐れているのでしょうか、それとも「死の陰」を恐れているのでしょうか。

「ターミナル・ケア」(終末治療)にたずさわる方が証しています。多くの場合、末期を迎えているような人は、死そのものよりも、孤独を恐れているといえます。

もし、最後まで傍らで見届けてくれるものがあれば、人はその死に際して、恐れを抱くことなく、自らをよく受け止め、その後を平安のうちに迎えられるといえます。

さらに言えば、死を恐れる原因といえば、死に際して、死んだ後先が不明であることから来る不安と、怖さにあるかもしれませぬ。私たちの一生は、長いようで、まことに短いものです。何時いのちのきずなが切れてしまうかわかりません。しかし、恐れではないのです。

既に、キリストが、神の右に座して、すべての人を御国に迎え入れてくださる担保となられて、御国での再会が約束されているのであります。

第三の益・利益は、「主は、御霊を、これと見合う担保として与え、その御霊の力によって、われわれは、キリストが神の右に座しておられる、あの上にあるものを求め、地にあるものを求めないようにして下さるるのゆえ」。

「主は、御霊を、これと見合う担保として与えてくださった」とありますが、主イエスは、次の言葉を弟子たちに残して、天に昇られました。

「あなたがたを捨てて孤児とはしない。あ

なたがたのと「さ」に帰してやる」(18節)。「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起こさせるであらう。」(ヨハネ14:26)

主イエスが昇天に際して、「別の助け主」とも「慰め主」と言われている「聖霊」が、「自分になり替わって、教え導く真の牧会者になると申しております。

12使徒たちの説教においてもそうしたことと言われています。

「神はこのイエスをよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである。それで、イエスは神の右に上げられ、父から約束の聖霊を受けて、それをわたしたちに注がれたのである」(使徒2:33)。

殉教したステパノは、「天が開けて、神の右に立っておられるイエス」(使徒7:55)を「見た」といいます。

サウロ・後のパウロもまた、このステパノ殉教の様子を真近で見ました。ロマ書8節34節には、「キリスト・イエスは死んで、甦って、神の右に座し、また執成してくださったのです」と、パウロもまた、天の御座を望み見ております。

神の右に坐しておられるキリストの御支配を確信した時から、地上の教会は、大胆に福音を宣べ伝え始めました。地上の全ての教会は、神の右に坐しておられるキリストに執成なされている教会です。

「主イエスは昨日も、今日も、明日も変わらありません」「一、変わることもなく、神の右に坐しておられるお方であると信じていれば、地上の教会は、どのような闘いにも

耐えるのではありませんか。

今まで私たちの多くは、それほど深く考えないで、「天に昇り、・・・神の右に座したまえり」と唱えてきたかもしれませぬ。やむを得ない点もあります。キリストは弟子達が見ている前で天に攀げられ、雲に迎えられ、その姿が見えなくなったと言われているのですから、これは私たちの思考の枠の外にあります。いえ、キリストが人間のすがたをとって受肉したということも思考の枠の外で、いえ、いえ、十字架も復活も、わたしたちの思考の枠の外なのです。さらに、復活・昇天ともなれば、アテネの市民は、「そのことは、またあとで聞くことにする」との言葉を残して立ち去りました。

しかし、主イエスの降誕―十字架―復活―昇天―再臨は、すべてリンクケイジしています。どれ一つとして欠くことの出来ない「神の救いの御計画」これを「ファイブ・ゴールド・チェイン」(五つの黄金の鎖)と称しております。

今朝は、天に昇られ、神の右に坐し、執成しておられる大祭司キリストを覚えたいと思えます。

新聖歌465番

【共に祈りましょーじ】

天の父よ、キリスト・イエスは死んで、甦り、神の右に座して、わたしたちを、絶えず執成し、弁護し続けていて下さることを感謝します。主イエスキリストの名に  
 祈ります。アーメン